

## チャルチュアパ遺跡発掘調査について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 伸幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/24943">http://hdl.handle.net/2297/24943</a>

# 金大考古

## 第67号

The Archaeological Journal of Kanazawa University volume 67 July 2010

### チャルチュアパ遺跡発掘調査について

伊藤伸幸

はじめに

チャルチュアパ遺跡は、エル・サルバドル共和国の東部に位置しており、ラス・ビクトリアス、エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマル、ペニャテなどの地区に分かれている。チャルチュアパ遺跡のなかでは、タスマル地区は南に位置している。この地区では、

場があるかを確認することである。この地区の北東部分には、球戯場を形成すると考えられているマウンド2基(B1-3, 4)があるが、考古学的に確認されていない。しかし、1940年代まで墓地として使われていたために、ボグスはこの部分の調査を実施しなかった。そのうちの1基(B1-3)は部分的に破壊されている。もう一つは、この地区の建築史に関する仮説を検証することである。この仮説については後述する。2009年度は主神殿と思われる埋もれた神殿の調査を行い、出土すると推定される王墓の人骨から人の移動を調査研究する予定であった。しかし、エル・サルバドル政府の文化庁内の人事異動により調査許可が下りなかったために、発掘調査を実施することが出来なかった。2009年度は今までの出土遺物を整理し、今後の調査の方向付けすることができた。

以下では、最初にタスマル地区の建築史に関する仮説を解説する。次に、2009年度までに行われた調査の主な成果について説明する。最後に、今後の調査の展望について、述べる。

#### 1. タスマル地区 B1-1 建造物の建築史に関する仮説

ここで示す仮説は、2003年から2004年にかけて、CONCULTURA と名古屋大学が行った測量調査に基づいている。

“列柱の建造物”(西基壇の上部建造物)を測量した結果、この建造物は南北30m長で独立して建てられたことが確認できた。B1-1建造物の北には、“列柱の建造物”に似た建造物(北基壇)があった。北基壇は西基壇と同じ長さを持ち、それぞれの基線は直角に近い87度で交差している(図1a)。

B1-1建造物は、大きな基壇(大基壇)の上に建っていた。大基壇は東西約73m南北87mであった。北基壇と西基壇は大基壇の一部と成っていた。この基壇2基は類似しており、同時期若しくはなんらかの関係を持って、当初、独立して建造されたと考えられる。後の時期の増改築が考慮されるが、上部の建造物が左右対称に確認されるのは西基壇のみである。一方、こ

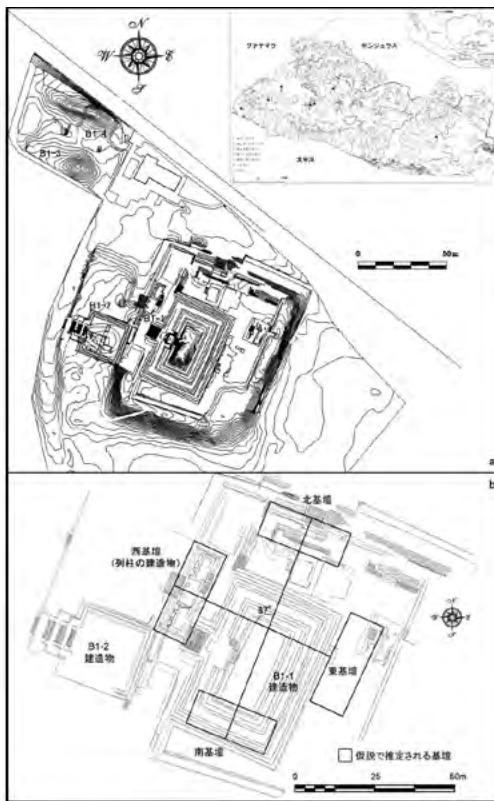


図1 チャルチュアパ遺跡

ボグスが1940年代と1950年代初めに発掘を行った。1947年には国の歴史記念物として認定されたが、考古学的に明らかになっていない点が多くあった(伊藤・柴田 2007)。この曖昧さはこの地区の建造物の発展段階の複雑さにあり、様々な大小の改築や増築が建造物に施されていた(図1)。

2005年2月15日、名古屋大学の考古学調査が開始した。この調査目的の一つは、タスマル地区に球戯

の地区の建造物の正面は西を向いている。このため、北基壇より西基壇が重要な意味をもち、中心となる入口があった。北基壇が西基壇の正面に対して左右対称に建てられていたと仮定するならば、南基壇は北基壇と同じ距離にある可能性がある。

西基壇と北基壇の距離を測った結果を用いて、南基壇の位置を計算した。仮説に従うと、南基壇の南側は拡大された大基壇の南端に相当する。また、この基壇では少なくとも3回拡張された可能性がある。この推定される基壇の南側は最初か2度目の建設期に相当する。このような建造物の拡張が北・西・南基壇にも考えられる。同様に建築における対称軸を想定すると、東基壇の位置も計算できる(図1b)。

B1-1 建造物の東側には、この建造物に接して平面で約4×3mの小さな構築物がある。B1-1 建造物に属するものかは不明であるが、西基壇の基線を東に延ばすとこの構築物の中心を通る。東側では、東に向かって少なくとも3回の大基壇の拡張が確認され、計算では最初の拡張期の東基壇がこの構築物の位置にある。

西基壇の上部の建造物は“列柱の建造物”として知られ、方形の柱群と左右対称に南北で各1部屋ある。西の階段を上ると北と南の部屋の上に2つの柱が建っている空間がある。この空間が奥への入口となっている。北の部屋の出入口は東側のみにある。東側ではこの基壇の裏側は部分的にしか発掘されておらず、後側に建造物があったかどうかは不明である。B1-1 ピラミッド基壇が造られる前の主神殿については、以下の2つの可能性が考えられる。

1. 西基壇は、当初、主要な神殿として機能していた。
2. 中心となる基壇は北基壇と西基壇が交差する部分にあった。

仮説に従えば、この神殿はB1-1 ピラミッド基壇の基線の北13mにあったと考えられる。ボグスはB1-1 建造物の階段中央にトンネル発掘を実施した。この神殿に相当する建造物は検出されなかったが、西基壇の北の部屋の入口は東側にあることを考慮すると、西基壇の後(東側)に建造物があり、この上部の建造物が主神殿として機能していた可能性がある。

タスマル地区の建築段階は次のように考えられる。主神殿と基壇4基を東西南北に建造した。西基壇は、主神殿に至る正面の入口を持つ建造物として機能して

いた。次に、基壇4基の間にある空間を充填し、65×74mの巨大な基壇(大基壇)となった。その後、この大基壇の上にB1-1 ピラミッド基壇が主神殿を覆うように建設された。

## 2. チャルチュアパ遺跡タスマル地区調査

仮説によって推定された東基壇、南基壇、北基壇、西基壇、そして、主神殿の位置で試掘坑を設け、発掘調査を行った。以下ではその概要を説明する。

北基壇が推定される地域では、この基壇の南端が検出できなかった。北基壇の東壁を南の方に追求して行くと、B1-1 ピラミッド基壇の内部に入ってしまった。このことを考慮すると、もし東基壇が存在していたとするならば、東基壇の大部分が壊されてしまったことが考えられる。しかし、推定した東基壇は無く、推定された部分は日乾レンガと土で埋められていただけの可能性が高い。この場合には北基壇と南基壇が一つとなっており、西基壇若しくは“列柱の建造物”がこの北と南の基壇が一つになる大きな基壇に付属していることが考えられる。このことを考慮すると西に突出部分がある凸型の建造物があったことが考えられる。そして、“列柱の建造物”がこの建造物の正面部分になっていたことが考えられる。

一方、主神殿があると推定された部分から階段部分が検出された。このため、仮説で提示した主神殿が存在していた可能性が高くなった。この神殿は斜壁と張

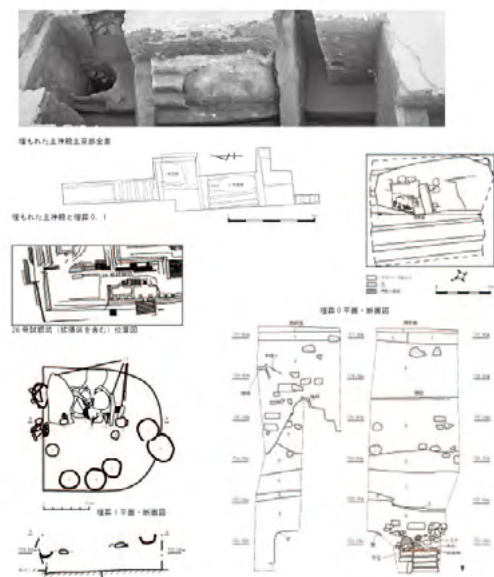


図2 主神殿と埋葬

り出し部分を持つこと以外は不明であるが、この建造物の中心を通る基線上に埋葬0、基線近くの会談の横から埋葬1が出土した(図2)。埋葬0では、彫刻された骨製品1点、黄鉄鉱製円盤1点、そして、ヒスイ製垂飾5点、ヒスイ製玉3点とトルコ石製玉75点からなると考えられる首飾り1本が副葬されていた。また、埋葬1には、土器7点、黄鉄鉱製円盤1点と赤色顔料の円形塊2点が出土した。この黄鉄鉱製円盤に貼り付けられたと考えられる薄いヒスイ製板状破片数百点も一緒に出土した。

B1-1 建造物と球戯場(B1-3, B1-4)の建築史を建築材の相違などから考慮すると以下ようになる。

1) 東西南北に基壇4基を建設する。西基壇はこの時期の主たる建造物であった可能性がある。また、もう一つの可能性として、3基の基壇(西基壇、北基壇、南基壇)を建設し、西基壇を主神殿の入口若しくは正面として機能させていた可能性がある。

2) 4基の基壇が囲む中庭に主神殿を建設する。西基壇は主神殿の正面入口として機能している。また、東基壇はある程度破壊される。もう一つの可能性としては、3つの基壇(西基壇、北基壇、南基壇)が一つになり、凸形の大きな基壇となる。

3) 最終的に、すべての基壇を埋めて、ピラミッド基壇B1-1が建設される。

4) B1-2 建造物が建設される。この建造物が建設される時期ぐらいに球戯場の最後の増築が終わる。

一方、B1-4 建造物の最初につくられた時期とイロパンゴ火山灰より下にある床の時期は不明である。また、球戯場の増築の回数は1回だけなのか数回に亘ったのかは不明である。

次に、発掘調査で判明した興味深い事実を説明する。B1-1 建造物の南側で3つの試掘坑(15-17号試掘坑)で南基壇を確認する発掘調査を行った。数層の石と土の互層が確認された。試掘坑の断面をみると、数列の石列が確認できる。このために、最初に石を水平に置き、石の間に土を入れて固めたことが考えられる。720 mと721 mの間に床がある。この床面は試掘坑の北にある南基壇の一部である可能性がある。

15号試掘坑では720 m前後で、供物が出土した。この供物は、円筒形土器と、その蓋となる椀形多彩文土器からなる。この多彩文土器の文様は様式化されたジャガーの顔を表現している可能性がある。その2

個の土器の上には平石1個があったが、次の建設期に覆われてしまった。円筒形土器のなかには、小型板状ヒスイ2点、ヒスイ破片52点、二枚貝の破片1点、巻貝の破片1点、多数の獣骨、雲母、赤色顔料が入っていた。

円筒形土器の文様は上下の水平方向の帯で分けられ、さらに垂直方向の2つの帯で2つの場面が浮彫りされている。各場面は頭飾りをつけた人物が表現されている。右側の人物は左の人物よりさらに飾られた頭飾りをつけている。両人物とも頭蓋変工を受けている。フンドシと着け、胸の前に容器を持っている。容器の上では放血儀礼を行っている。水平方向と垂直方向の帯状部分では、前に櫛状物後に●2個が付いている人の顔が繰り返されている。以上のことを考慮すると、高位の人物若しくはタスマルの支配者である可能性がある。また、円筒形土器は南基壇の南東角から出土しており、後にはB1-1 建造物で覆われてしまった。このことも合わせて考えると以下のような可能性がある。

南基壇を拡大する際に、前の支配者と共に新しい支配者の即位式が行われた。その時には、自己犠牲が行われた。同様に考えると回りに彫られた人の顔は、即

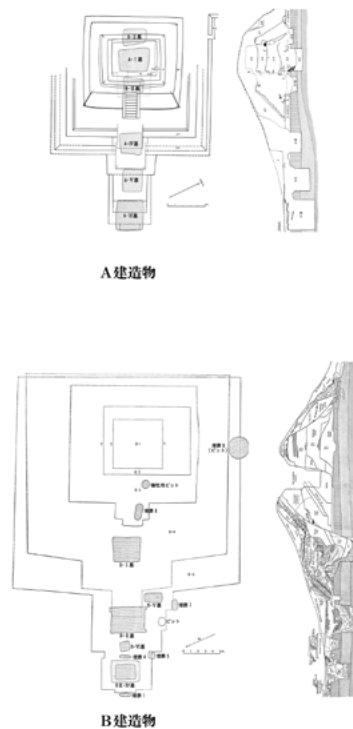


図3 建造物 A, B

位式を見つめる神若しくは支配者の先祖である可能性が考えられる。

一方、南基壇を更新する際に、土器2点からなる供物が捧げられ、儀礼が行われた。この建設に伴う儀礼は即位式と関係する可能性がある。この場合、以下の2つの可能性がある。

- 1) 新しい支配者の即位に伴って古い建物を覆って新しい建造物が造られた。
- 2) 新しい支配者が即位に伴って神殿を新しく建造する必要があった。

### 3. 今後の課題

この主神殿に関連して出土した埋葬2基とメソアメリカ南東部太平洋側の遺跡を考慮すると、タスマル地区 B1-1 建造物内に埋もれている主神殿に王墓があった可能性が高い。この地域最大の都市遺跡であるカミナルフユでは、古典期前期の A・B 建造物のなかから、建造物の基線上に墓がみつまっている(図3)。また、B 建造物においては、基線の近くにも埋葬や墓が検出されている。基線上にある主たる墓と基線近くに配置された墓若しくは埋葬がどのような関係にあるのかは明確ではない。建造物の基線上にある墓はこの古代都市の重要人物若しくは支配者である可能性が高い。

また、カミナルフユの事例をみると基線より北側に主たる墓とは別に埋葬が配置されていた。タスマル地区の埋葬0は埋もれた主神殿の中央を通る基線上、埋葬1は基線より北側にある。この状況はA建造物よりB建造物に似ている。タスマル地区ではカミナルフユなどの先スペイン期の王墓とそれ以外の墓や埋葬と比較し、古代メソアメリカ史の一部の再構築が出来ると思う。

### 参考文献

伊藤伸幸・柴田潮音「チャルチュアパ遺跡タスマル地区 B1 - 1 建造物南側より出土した供物に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』158:13-28, 2007.

(email: nobuyuki@lit.nagoya-u.ac.jp)

## 玄達瀬海底から引き揚げられた越前焼

田中照久

### 1. はじめに

福井県坂井市を流れる九頭龍川の河口にある三国湊の沖合い西へ約37kmの日本海中に玄達瀬はある。玄達瀬は北東に向かって約縦18km、幅は7kmと細長く伸びており、周囲の海深は約-300m~250m、最も浅い「中の瀬」は海深-9m。もし、海底から玄達瀬を見上げたら、突如目の前に細長く垂直に近い巨大な壁が現れ、海面近くまで延びているように見える。

夏になると対馬海流が入り、2ノット(時速3.9km)の潮流が浅瀬に当たり、複雑な流れとなる。越前海岸沿いの人々にとって玄達瀬は「海の米櫃」とも言われる好漁場であり、近年においてはダイビングスポットとしても有名であるが、過去幾度も海難事故が発生しており、海坊主が現れて柄杓で海水をかけて船を沈めようとするという伝説がある。

この玄達瀬の海底より、地元の漁師の方が越前焼大甕などを引き揚げられた(1)。これら引き揚げられた越前焼は、生産地のある丹生郡越前町からどのようにして玄達瀬まで行き、更にどこへ運ばれようとしていたのであろうか。生産地の様相と流通の両面からその謎の一部を解き明かしたい。

### 2. 引き揚げ資料

1. 1982年2月末か3月初旬、越前町の漁師の方がカレイの底引き網漁中に玄達瀬近くの海深-270mの地点より引き揚げた。この漁師の方は、後日越前岬沖約64km海深-630mの海底より弥生時代後期の山陰地方で焼成されたと思われる土器(高さ33.9cm)を引き揚げている。(福井県陶芸館蔵 写真1)  
(1) 越前大甕 高さ74.7cm 口径49.5cm 胴径64.8cm 底径21.3cm(個人蔵 図1-4)

大甕は越前ねじたて(紐輪積み)技法により成形、焼成はきわめて良好でよく焼き締まり、肩に自然釉がうっすらと付着する。筆者が1983年1月に引き揚げた方の庭先で拝見した時には、海底の付着物が甕全面に見られたが、現在はほとんど剥離している。「木」風の刻文が肩に見られる。

2. 1986年2月、アマエビ漁中、別の漁師の方が